

平成 29 年 6 月 22 日

平成 29 年 6 月 16 日（金）九州高等学校 PTA 連合会大会

「がまだずばい熊本大会」（熊本県立劇場・熊本学園大学）

第 3 分科会「防災教育と PTA 活動」参加報告

大島高校副会長 平 正美

先日、熊本にて開催されました九州高等学校 PTA 連合会大会第 3 分科会に、大島高校より一人参加させて頂きましたので、ご報告させていただきます。

「防災教育と PTA 活動」と題された第 3 分科会は、熊本県立教育センターの大塚主幹の司会のもと、初めに、熊本県立第一高校の女子生徒 6 人による研究発表が行われました。昨年発生した熊本地震について全校生徒にアンケートを取った結果、震度の大きかった地域は、マスコミに発表されている以外にもこまごまと何ヵ所もあったという事、自分の住んでいる地域のことを知らなすぎるという事に気付いたというものでした。

司会者の大塚主幹の基調講演では、実は 128 年前の明治 22 年に、熊本でマグニチュード 6 以上の地震があり、その時も 5 日間隔で 2 度の大地震だった。しかし、自分自身もだが、そのことを知らない人が多い。語り継がれていないのは問題なのではないか。それを踏まえ、①地域についての知識を確認して②先進的な取り組みをし③まずは我が家の防災について考えよう！という事で、日本には、安全地帯はない！だから、防災をきちんとしておかなければいけない！というお話でした。

ここで、全員参加型に切り替えます。想像してみてください。

- ① 今あなたは、自宅でゆっくりとくつろいでいます。
- ② そこに突然の大地震が起きました。
- ③ さて、その 5 分後、あなたはどうなっているでしょうか？

さあ、20 秒間想像してみてください。どうなりましたか？

そんな問いかけの後、実際の、今年の地震直後の室内の映像を見せられました。ベッドの上に大きな家具が倒れ、家がひっくり返ったような衝撃的な映像でした。

そして、人間には「正常バイアス」というものがあり、「自分だけは大丈夫」と、自分の都合の悪い情報は無視したり、過小評価する傾向があるという事でした。実際に、昨年、一度目の地震の後、両親は車中泊をされていて、「大丈夫、大丈夫」と家に帰っていた子供だけが二度目の地震で亡くなったという事例もあったそうです。

その後のある学校の防災訓練は、自衛隊や消防士・地域の方も共同で本格的に行うようになった。テント建てや土嚢作り、瓦礫からの救助、搬送、バケツリレー、体育館内での避難所開設、簡易トイレの設置、救護所での色分けによるトリアージの訓練、そして、炊き出しは1000食分を作るそうです。実際に昨年、どの学校でも、毎回1000食～1500食を4～5日間作ったので…という事でした。

その後、(1)近所で居酒屋を経営し、地震後、町の復興プロジェクトの代表をされている上村元三さん、(2)県立東稜高校の真田武副校長、(3)被災者ボランティア代表の熊本学園大学4年生の上中倫正さん、(4)県立第一高校好文会副会長の赤松祐さん、の4人によるパネルディスカッションが行われました。

ここでは、昨年の地震発生から現在に至るまでの様々な壮絶な体験が語られました。

益城町の隣町のある東稜高校には、最大2000人が避難してきて、グラウンドは車中泊で埋まった状態が2ヶ月半続いたそうです。そんな状況の中で、実は、ボランティアの中に不審者が出たり、ストレスから、無力な子供たちを傷つける親が出たり、また、時間がたつにつれ、一人で2階に上がれないとかトイレに行けないなどの二次障害も現れ、心のケア・サポートもとても重要だったそうです。

また、自衛隊が到着するまでの3日間は自力で乗り越えなければいけないので、先ほどの防災訓練は本当に必要だという事でした。

そんな中、子供たちが本当によく頑張ってくれた！というお話もありました。

まず、地震は、4月14日・16日に発生しているので、特に新一年生の連絡体制が整っておらず、携帯電話も繋がらなかった震災直後は連絡が取れず困った。そこで、中高生にお願いし、国道3号線沿いに立ってもらった。すると、報道の車が通るので、つかまえて避難所に連れてきてもらい、テレビ等で休校などのお知らせしてもらうことができた。

次に、電話がつかえるようになったが、2000人分の水と食料をどうやって確保したらいいのか、大人が悩んでいると、高校生・大学生が、SNSで「〇〇学校、水が足りません」と発信。すると一気に集まった。中には、家にある水とお米を自転車に乗せ、長距離を走って届けてくれた高校生もあり、その姿を見た時には涙が出た。

そして今度は、物資が余るようになった。しかし、どこに困った人がいるのかわからない。その時も学生たちが SNS で情報を流し、物資の不足している地域に届けることができた。ある日のパンの配給の時には、「一人一個」といって配っているのに、「どうしても私は2個ほしい」というおばさんを子供が叱っている姿もあった。

高校生は中心になって自主的に動いてくれた。子供たちは、本当に生きる力を持っています！本当にスゴイ！！

離島の島原から転校して熊本の高校に入り被災した一人のある女子高生は、まだまだ授業のできない状況を見て、自ら、もと居た島原の学校に直接連絡し、そこで勉強させてくださいとお願い。そこから大人が動き出し実現。その女子高生は広島大学に見事合格した。という話もありました。

ある学校では、生徒会の中に新たに”防災委員会“が誕生し、研修に行ったり、4月14日には全体集会を行っているそうです。

震災後、そんな学校生活もままならない状況の中、地域の方々の応援や要望もあり、唯一、体育祭を開催したのが、県立第一高校だったそうです。生徒全員が、それぞれの体育シャツの袖に紋章のように思い思いの言葉を書いて参加した。その中で一番多かった言葉は「当たり前」に感謝」だったそうです。

かなり抜粋していますが、報告は以上になります。

学校や行政で取り組んでほしい内容もたくさんありましたが、私たちが誰でも今すぐ実行できる取り組みは、「挨拶」だと思いました。知らない人について行ってはいけませんが、すれ違う人には挨拶をするという事を、幼少期から各家庭で教えるべきだと思いました+。そして、挨拶から始まり、何気ない地域活動やPTA活動が、いざという時に命を救ってくれるパイプラインになることを再認識し、できることから、いろんな事に挑戦したいと思いました。

とても有意義なPTA連合大会に参加させていただき、本当にありがとうございました。